

「盲亀浮木の喩」と定家の恋歌

金 沢 篤

I. ボルヘスと盲亀浮木の喩

ボルヘス (Jorge Luis Borges:1899-1986) の講演集『七つの夜』Seit Nachos の第四夜「仏教」の中に、次のような興味深い記述が見られる。

「人間に許された六つの運命（人は悪魔になる可能性があるし、植物、動物になる可能性もある）のうち、もっとも難しいのは人間になる運命であり、私たちはその運命を利用して自分たちを救済しなければなりません。

ブッダは海の底にいる亀と浮いている腕輪を想像します。六百年ごとに亀は海から頭を出しますが、頭が腕輪にはまることはきわめてまれでしょう。そこでブッダはこう言います。「私たちが人間となることも、亀と腕輪に起きることと同じくらいまれなのだ。私たちは涅槃に達するために、人間となったことを利用しなければならないと。」(野谷 [2011R]123 頁)

仏教徒ならざる現代アルゼンチンの世界的な作家ボルヘスが、仏教と仏教の「盲亀浮木の喩」をどのように理解し、どのように受容したかを伺う格好の資料である。それにしても不思議な文章／講演である。ブッダの言ったとされる言葉のうちにある二つの「私たち」の内の二番目の「私たち」は「あなたたち／君たち」に改めないと意味が通らないのではないか。

確かに、この短い数行は気になる表現に満ちている。だが、仏教の専門家ならば、これを直ちに次のように捌いていくことだろう。前半に出る「六つの運命」とは、「六道輪廻」のことである。「悪魔」とは、いわゆる「阿修羅」。「植物」は「草木」だが、草木は、「六つの運命」という場合には、どこに分類されるのだろうか。「動物」は「畜生」のこと。また、後半では、仏教で有名ないわ

ゆる「盲亀浮木の喩」が説明され、それが「人身は得難い」ことの喩えに用いられている。「六百年ごとに」は「百年ごとに」あるいは「千年ごとに」の間違ひではないか。ボルヘスのプレゼンに至るどこかの段階で勘違ひやすり替えの起こった可能性がある。また、通常は「盲目の亀」か「一眼の亀」と「浮木」の対比の下に用いられるその有名な譬喩が、野谷氏の翻訳文では「亀」と「腕輪」の対比で描かれている。亀が盲亀（ないし一眼の亀）である点については一切触れられていない。やや奇妙に思われる。とりわけ奇妙なのは、「浮木」や「浮木孔」として扱われる「亀の相方」が、「浮いている腕輪」となっている点である。「腕輪」、それをわたしたちはどんなものと想像したらいいのだろう。腕時計や、腕を飾り立てるアクセサリーとしてのプレスレットのようなものか。スペイン語にはさっぱり通じていない筆者ではあるが、ここは、どうしても、ボルヘスの原文を参照すべきだろうと考える。ボルヘス作品の和訳者が、仏教やその譬喩について知らぬままに、とんちんかんな訳語を選び、奇妙な訳文を仕立ててしまった可能性があると考えられるからだ。該当箇所を以下に引こう。

De los seis destinos que están permitidos a los hombres (alguien puede ser un demonio, puede ser una planta, puede ser un animal), el más difícil es el de ser hombre, y debemos aprovecharlo para salvarnos.

El Buddha imagina en el fondo del mar una tortuga y una ajorca que flota. Cada seiscientos años, la tortuga saca la cabeza y sería muy raro que la cabeza calzara en la ajorca. Pues bien, dice el Buddha, “tan raro como el hecho de que suceda eso con la tortuga y la ajorca es el hecho de que seamos hombres. Debemos aprovechar el ser hombres para llegar al nirvana”.(Borges[1982]p.91)

【英訳】 The Buddha imagined that at the bottom of the sea is a tortoise and a floating bangle. Every six hundred years the tortoise sticks its head out. It would be extraordinary if it put its head through the bangle. But, said the Buddha, to be human is as rare as the tortoise putting its head through the bangle. Yet we must be men before we may reach Nirvana. (Weinberger[1984/1986].p.70)

筆者が和訳文を通じて不可解に思うのは、スペイン語の原文の下線を付した二カ所である。「浮いている腕輪 una ajorca que flota」と、仏陀の直接話として

引用符によって括られた文の主語としての「私たちは」である。スペイン語原文の正しい訳文となっているのだろうか。二つ目の段落に関しては英訳も見ておこう。英訳では「浮いている腕輪」 a floating bangle。スペイン語 *ajorca* と英語 *bangle* が和訳では「腕輪」である。また先にも触れた箇所。仏教に馴染みのわれわれは、英訳にある「だが、仏陀は言った。『人間となることは、その〔盲目の〕亀が、その〔浮いている〕腕輪の中に突っ込むことと同じくらい稀なことである』と。いや、私たちは、涅槃に到達する前には、人間でいなければならないのである。」の方を支持するのではないか。スペイン語に基づく和訳と、英訳では「私たち」の意味していることがらは微妙に異なるのである。和訳の「私たち」の中には、仏陀が含まれているのに対して、英訳の「私たち we」の中には、仏陀は含まれていない。「私たち」と言っているのは、語り手たるボルヘスその人である。この場合、スペイン語版の方が、英訳より優先されるべきだということはないのではないか。講演がボルヘス自身のスペイン語で行われたとしても、それをテープ起こしたのは第三者、引用符を付したのは、テープ起こしをした人物にちがいないのである。英訳の方が妥当なものではないか。つまりスペイン語版の該当部分は、引用符の位置を変えて、以下のようになるべきである。

Pues bien, dice el Buddha, “tan raro como el hecho de que suceda eso con la tortuga y la ajorca es el hecho de que seamos hombres.” Debemos aprovechar el ser hombres para llegar al nirvana.

さて、野谷氏の訳文中の「浮いている腕輪」 *una ajorca que flota* でわたしたちは何をイメージするだろうか？ その「腕輪」が浮いているのだとすると、「腕輪」の材質は自ずと限定される。金属の場合は、「腕輪」が浮いていることはありえない。いや、「腕輪」の浮く・浮かないは、材質のせいではない。どのような「腕輪」であろうとも、「腕輪」は基本的に浮くことなどないと言うべきなのではないか。では、ボルヘス自身は、その *ajorca* で実際にはどのようなものをイメージしていたのだろうか？ 英訳では *bangle*。インターネットなどで *bangle* を見ると、その画像などが見れる。これは、やはり浮くものではない。われわれが「腕輪」から連想するのは、浮木が持つ「穴」「孔」 *hole* そのものである。だが、穴／孔だけが、水の上に浮かんでいることはあり得ない。したがって、このスペイン語の原文からの和訳としてある記述の特に *ajorca* の訳語

としての「腕輪」には、疑義を呈さざるを得ないのであるが、ajorca が「腕輪」以外に訳しようがないのだとすれば、そこにもボルヘスの某かの勘違いがあることになる。

《亀》・海・《浮いている腕輪》・頭・《人間となること》

翻ってみるに、仏教徒ならざるボルヘスは果たして、この譬喩をどこから得たのだろうか。「盲亀浮木の喩」は、『法華経』を初めとして、色々な仏典に用いられる有名な譬喩である。『雑阿含』の場合がよく引かれる。『テーリーガーター』や『ミリンダ王の問い』の用例がよく引き合いに出される。ここにもそこにもあそこにもこの「盲亀浮木の喩」は用いられる。だが、今の場合、『大般涅槃経』第二に現われる以下の偈文の用例はどうだろうか。

「生世爲人難 値佛世亦難 猶如大海中 盲龜遇浮孔」（大正蔵 Vol.12 372c, 11.22-23）『大般涅槃経』（北本：40 卷本：曇無讖訳）

（世に生まれて人と為ること難し。仏陀の世に値うことも難し。なお、大海の中にあつて、盲亀が浮いている孔に遇う如しである。）

なお翻訳者の曇無讖は、同書の以下の散文／長行部（第二十三）においては、『法華経』などの他の用例で普通に見られる「浮孔」ならざる「浮木孔」と用いている。

「人身難得如優曇花。我今已得。如來難值過優曇花。我今已值。清淨法寶難得見聞。我今已聞。猶如盲龜值浮木孔。」（大正蔵 Vol.12 498c, 11.23-26）『大般涅槃経』（No.374）（北本：40 卷本：曇無讖訳）

“It is hard to be born a human. This can be compared to the coming into bloom of the udumbara flower. But now I have gained it [i.e. the human state]. It is hard to meet the Tathagata, but now I have met him. It is hard to see and hear the pristine treasure of Dharma, but I now hear it. **This is like a blind tortoise chancing to hit the hole in a piece of floating wood.**”(Yamamoto[Kindle Ed.]No.9629.29-No.9643.3/18052)

その譬喩の多くの用例が亀ないし盲目／一眼の亀と浮木の間で展開しているのに対して、この『大般涅槃経』第二の用例にあつては、盲亀と「浮木」ならぬ「浮孔」、「浮いている腕輪」にも比すべき「浮いている孔」との間で展開しているのである。ボルヘスの情報源は、もしかしたらこの『大般涅槃経』第二かも知れないと考える所以である。この『大般涅槃経』の山本晃紹氏による英

訳は以下のものである。

It is hard to be born man; harder yet is it to meet
 With the coming out in the world where there is the Buddha.
 It is as in the case of a **blind tortoise**
 Which, amid the ocean, may mean to hit at a **hole**
Of a floating wood². (Yamamoto[1973],p.34)

英訳者の山本氏は、「浮孔」を英訳するにあたって、孔の保持者たる「木」wood をしっかり補って、「浮木孔」 a hole of a floating wood としている。ボルヘスの「浮いている腕輪」 una ajorca que flota は、直接的には『大般涅槃經』第二の詩文に現れる「浮孔」（浮いている孔）などを受けているのではないか。このように、ややとんちんかんな面をはらみつつも、異教徒と言うべき「盲目の作家」ボルヘスによる「盲亀浮木の喩」と「仏教」の理解は、概ね妥当なものである。その譬喩を用いた仏陀の意図を「私たちは涅槃に達するために、人間となったことを利用しなければならない」と総括したボルヘスの仏教観は概ね正鵠を射ていると言うべきであろう。仏教の目的を「涅槃に達すること」と捉え、それを実現することは「人間のみ可能なこと」そして、人間として生まれることが如何に難しく、[仮に]人間として生まれ得たとしても、『大般涅槃經』に出る如く、そこが「仏陀」のいる世界であることは如何に稀有なことか？そして、幸いにして、仏陀のいる／仏陀の教えの行き渡っている世界に生まれついたならば、その千載一遇の好機を十分に活用して、みごとに「涅槃に達す」べきである、つまり、「仏陀になる」べく努力すべきであると理解しているのである。

《盲亀》・大海・《浮孔》・《生世爲人難》／《值佛世亦難》

本論攷では、ボルヘスの理解した仏教の目的そのものに立ち入るわけではないが、その目的の理解に資した「盲亀浮木の喩」の方に主眼をおいて、そうは解し難いものではない譬喩そのものの解明ではなしに、譬喩を別の文脈に展開させた一つの実例としての和歌のあるものに関して、論じようとするのである。『法華經』中のその「盲亀浮木の喩」を踏まえて一つの夢をみごとに紡いでわれわれの時代に伝え残した中世の一歌人、藤原定家の夢の世界に論究してみた

いと考える。

II. 仏典と盲亀浮木の喩

まずは『テーリーガーター』の用例を見てみたい。

500. sara kānakacchapam pubbe samudde aparato ca yugacchidam /
siram tassa ca paṭimukkaṃ manussalābhamhi opammaṃ. (Therīgāthā 500)

「五〇〇 東の海に浮ぶ盲亀が西から流れて来る軛の穴に、その頭を突き込むという〔喩え〕を思い浮かべてください。それは<人身は得難い>ということを示す譬喩なのです。」(中村元 [1982]95 頁)

この用例が意味を持つのは、漢訳譬喩語の元になるパーリ語/サンスクリット語の用語を具体的に確認出来ることである。盲亀 (kāṇa-kacchapa/kāṇa-kaśyapa) と海 (samudda/samudra) と軛の孔 (yuga-chidra/yuga-chidra) と頭 (sira/śiras) と人身の得 (manussa-lābha/manusya-lābha) . . .

《盲亀》・海・《軛の孔》・頭・《人身の得》

次いで、『マジマニカーヤ』の用例。

Seyyathāpi puriso, bhikkhave, ekacchigalaṃ yugaṃ samudde pakkhipeyya, tam enaṃ puratthimo vāto pacchimena saṃhareyya pacchimo vāto puratthimena saṃhareyya uttaro vāto dakkhiṇena saṃhareyya dakkhiṇo vāto uttarena saṃhareyya; tatr' assa kāṇo kacchapo; so vassasatassa accayena sakim̐ ummuḷḷeyya. — Taṃ kim maññatha, bhikkhave? Api nu so kāṇo kacchapo amukasmim̐ ekacchiggaḷe yuge gīvaṃ paveseyyāti ?

Yadi nūna, bhante, kadāci karahaci dīghassa addhuno accayenāti.

Khippataraṃ kho so, bhikkhave, kāṇo kacchapo amukasmim̐ ekacchiggaḷe yuge gīvaṃ paveseyya, ato dullabhatarāhaṃ, bhikkhave, manussattaṃ vadāmi sakim̐ vinipātagatena bālena. Taṃ kissa hetu? Na h' ettha, bhikkhave, atthi dhammacariyā samacariyā kusalakiriyaṃ puññakiriyaṃ, aññamaññakhādikā ettha, bhikkhave, vattati dubbalamārikā. (Mn iii, p.169)

「弟子たちよ、たとえば、人が穴の一つ開いたくびきを海中に投じたとして、それを東風が西へ運び、西風が東へ運び、北風が南に運び、南風が北へ運んだとします。そこに一匹の盲目の亀がいて、百年に一度浮かびあがったとします。弟子たちよ、この状況についてどう思いますか？ はたしてその盲目の亀はそ

のような穴の一つ開いたくびきに首をつっこむでしょうか？」

「尊き師よ、幾久しい年月のあいだにはひよっとするとそういうこともあるかもしれません」

「弟子たちよ、ひとたび悪い行き先に生まれ変わった愚か者が人になるということは困難であるとわたしは申し上げます。弟子たちよ、その盲目の亀がそのような穴の一つ開いたくびきに首を突っ込む事の方が、まだそれよりは速やかであることでしょう。それはどうしてでしょうか？ 弟子たちよ、悪い行き先には法に適用行ないがなく、正しい行ないがなく、善を積むことがなく、徳を積むことがないのです。弟子たちよ、そこには足の引っ張り合いがあり、弱肉強食があるのです。³」（長尾 [2005]322-323 頁）

《盲亀》・大海・《一孔ある軛》・首・《人性の得》

(eka-chiggaḷa) (gīva/grīva) (manussatta/manuṣyatva)

さらに『ミリンダ王の問い』の用例も見よう。

Yaṃ pana tvaṃ maharaja evaṃ vadesi: Devaddatto ca Bodhisatto ca ekato anuparivattantīti, so na jātisatassa accayena samāgamo ahoṣi, na jātisahasassa accayena, na jātisatasahasassa accayena samāgamo ahoṣi. Yaṃ paṇ' etaṃ maharaja Bhagavatā kānakacchapopamaṃ upadassitaṃ manussattapaṭilābhāya, tathūpamaṃ mahārāja imesaṃ samāgamaṃ dhārehi. (Milindapañña, p.204)

「また、大王よ、あなたは「デーヴァダッタとぼさつとは、いっしょにくこの生存から次の生存へと>流転した」とこのように言われるが、<両者の>出会いは、百生を過ぎたときでもなく、千生を過ぎたときでもなく、百千生を過ぎたときでもなく、幾多の日夜を過ぎた或る時、或る機会に出会ったのです。大王よ、さてこの両者の出会いは、あたかも、人身を受けること<がいかにむずかしく、またまれであるか>について、尊き師が説示された、盲亀<と浮木>の譬えのごとくであると知るべきです。」（中村・早島 [1964]207 頁）

《盲亀》・・・・《人性の得》

(paṭilābha)

そして、筆者にとって当面の課題となる『法華經』*Saddharmapuṇḍarīkasūtra*の第二十五章 Śubhavyūharājapūrvayogaparivarta（『妙法蓮華經』妙莊嚴王本事品第二十七）の用例は以下の通りである。

tat kasya hetoh / durlabho hy amba tāta buddha-utpāda udumbara-puṣpa-saḍṣo mahā-
arṇava-yuga-cchidra-kūrma-grīvā-praveśavat / durlabha-prādurbhāvā amba tāta buddhā
bhagavantah / (Sdhps XXV:p.463,Il.3-5)

For, father and mother, the appearance of a Buddha is rare to be met with as the blossom of the glomerated fig-tree, **as the entering of the tortoise's neck into the hole of the yoke formed by the great ocean.** The appearance of Lords Buddhas, father and mother, is rare. (Kern[1884//1965], p.423)

「それはなぜかといいますと、母上、父上、如来の出現はウドウンバラの花のようにまれであって、それは大海に漂流する軛の穴に（たまたま浮かび上がった）亀の頭がすっぽりはいる（ばあいの）よう（にまれ）だからです。母上、父上、仏陀・世尊たちはまことに出現することのまれなかがたです。」（松濤他 [2002]XXIII 242-243 頁）

「それは何故かと申しますと、母上、父上、仏の出現に会うことはウドウンバラの花のように得がたく、大海にある軛の穴に亀が頸を入れるようなものです。母上、父上、尊き仏の出現は稀有なことです。」（坂本・岩本 [1967//1976]299 頁）
「所以者何。佛難得値。如優曇波羅華。又一眼之龜。値浮木孔。・・・」（『妙法蓮華經』坂本・岩本 [1967//1976]299 頁）

《龜》・大海・《軛の穴》・頸・《仏陀世尊の出現》

(kūrma)(mahā-arṇava)

(prādurbhāva)

《一眼之龜⁴⁾》・《浮木孔》・《佛難得値》

← 『妙法蓮華經』

織田得能氏は、『妙法蓮華經』に関する名著『法華經講義』の該当箇所において、以下のように解説している。

「(字義) 優曇波羅とは此に靈瑞といふ。又瑞應ともいふ。此華三千年に一たび開く。開けは則ち金輪王出つといふ。其値ひ難きの意を取る耳。優曇鉢華とも云。○一眼之龜とは雜阿含經十五に云く。大海の中に一の盲龜あり。壽無量劫なり。百年を過ぎて一たび水面に出つ。一の浮木あり。只一の孔あり。海内に漂流して浪を逐ふて東西す。盲龜一たび出て、此孔に値ふて頭を穿ちて中に向はんと擬するに。其木西に浮ふときは龜或は東に出つ。遂に其孔を得ること難しと。是れ凡夫五趣の海に漂流して人身を得ること難きに譬ふなり。而して此一目の龜といふは少しく異なり。此は龜の腹に一の眼あるなり。此龜大海に浮

ひて浪にゆられつゝある中に朽木の穴あるにあひ。之に乗るとき折節風吹き來りて此木を覆へし。龜はあふむきになるとき腹の目か朽木の穴にありて日月の光を見ることを得るなり。然るに此龜か浮ひて水面に遊ぶ事はあれと浮木に逢ふ事まれなるへし。浮木にあふとも穴のある木にあふ事まれなるへし。たとひ穴のある木にあふとも腹なる目か穴にあたる事まれなるへし。又目か木の穴にあたるとも風に吹き反さるゝ事まれなるへし。故に一眼の龜の浮木に値ふて日月の光を拜する事はまれなる事ぞかし。之を以て佛世に逢ふことの難きにたとふなり。」（織田 [1899]96-97 頁）

『望月仏教大辞典⁵』には『雑阿含經』第十五の用例と共に、以下のように記されている。

「盲亀浮木」盲亀の浮木に値遇し難きの意。雑阿含經第十五に「譬へば大地悉く大海と成るに、一盲亀あり、寿無量劫なり、百年に一たび其の頭を出す。海中に浮木あり、止だ一孔のみあり、海浪に漂流し風に随つて東西するが如き、盲亀百年に一たび其の頭を出し、当に此の孔に遇ふを得べきや不や。（中略）盲亀浮木復た差違すと雖も或は復た相得ん。愚痴の凡夫五趣に漂流し、暫く復た人身あらんこと甚だ彼よりも難し」と云へる是れなり。（4864 頁）

譬如大地悉成大海，有一盲龜壽無量劫，百年一出其頭，海中有浮木，止有一孔，漂流海浪，隨風東西。盲龜百年一出其頭，當得遇此孔不？・・・＜中略＞・・・盲龜浮木，雖復差違，或復相得。愚癡凡夫漂流五趣，暫復人身，甚難於彼。（大 2 108.7-14）

《盲龜》・大海・《浮木》・頭・《人身》

Ⅲ．盲亀浮木の喩と和歌

和歌はわたしたち日本人が世界に誇る文学形式である。その代表的な「短歌」、〈五七五七七〉三十一文字という限られた文字数のうちに、無限と言い得るほどの多岐にわたる世界や感情を表現するものである。自撰他撰の歌集を編纂する場合は、それらを雑然と並べるのではなしに、なにがしかの分類の下にそれが行われるのである。仏教との関わりで言うならば、ある時期より「釈教歌」という分類の仕方が行われている。今の『法華經』などに登場する「盲亀浮木の喩」なども、和歌の題材を提供するものであり、種々に歌われているだろうと想像されるが、厳格な仏教の教理などを表現することに、その表現形式は必

ずしも適したものととは考えられない。

「平安末期の女芸人たちによって弘められ、「今様」と呼ばれた流行歌の集大成」と言われる『梁塵秘抄』巻第二、「妙莊嚴王品四首」として以下の四つの歌が収録されている。

「○釋迦の御法は浮木なり、參り會う我等は龜なれや、今は當來彌勒の、三會の曉疑はず。一六四

○昔の大玉妙莊嚴、古へ行ひせし故に、淨藏淨眼もろともに、一佛乗とぞ聞きたまふ。一六五

○聞くに羨しきものは、妙莊嚴の二人の子、淨藏淨眼親を導きて、菩提の道に入れければ。一六六

○戯れ遊の中にしも、先らに學びん人をして、未來の罪を盡すまで、法華に縁をば結ばせん。一六七」（佐々木 [1933/1941]38 頁）

『妙法蓮華經』第二十七「妙莊嚴王本事品」に取材した歌四首であることが瞭然だが、その最初の一六四の歌の中に、本稿が問題にしている「盲亀浮木の喩」を直接的に読み取ることが出来る。

《釈教歌》

「釈教歌」とは、「和歌の分類の一つで、仏教に関するものをいう。経典や教理をよんだもの、法事の際よまれたもの、無常観などをよんだものなどがある。」（『日本国語大辞典』）、「仏・寺・経典教理・仏事供養など仏教にかんする歌。または広く仏教思想に基づいた歌。」（『広辞苑 第四版』）である。歌集などを閲覧すれば、そのような分類の下に、和歌が並べられていることを直ちに確認できるはずである。各種仏典などに現れる「盲亀浮木の喩」なども、当然のように、釈教歌として分類されることになるが、先にも引いた織田 [1899] の該当箇所には、「盲亀浮木の喩」に関連した和歌が幾つも列挙されていて興味深い。

「 高辯上人

玉葉 目しゐたる龜のうきくにあふなれやたまく得たる法のはし舟 (*)

刑部卿頼輔

續千載 逢ひかたき法のうきを得たる身はくるしき海になにか沈まん

花園院御製

續千載 いたつらにくるしき海に沈みなは法のうきに又もあはめやも

西行法師

山家集 おなしくは嬉しからまし天の川のりをたつねしうきなりせば

皇太后宮太夫俊成

詠藻 わかの浦の浪にとしふる諸人ものりのうきに今日もあひぬる

詠藻 われやこのうきにあへる龜ならんこふはふれ共法はしらぬを

中納言定家

愚草 たとふなる波路の龜のうきかはあはても幾夜しほれきぬらん

爲明

高野奉納 さのみやはこの世なからに沈むへき浮木のかめの劫つくすまで」(織田 [1899]97-98 頁)

高辯上人とは有名な明恵のことで、久保田・山口 [1981] には、
「めしひたる亀の浮木に逢ふなれやたまたま得たる法のはし舟
漕ぎ行かん波路の末を思ひやればうき世の外の岸にぞありける」
とある。中納言定家が藤原定家、「愚草」とは定家の『拾遺愚草』である。

《定家の恋歌》

筆者の藤原定家の「盲亀浮木の喩」を用いた恋歌との出会いは、この織田得能の『法華経講義』だと思ふ。『仏教大辞典』などで著名な織田得能の教養の広さに驚嘆すると共に、その中の藤原定家の和歌に興味を覚えた。定家の作品集『拾遺愚草』上の最後に置かれている以下の歌である。

「又如一眼之亀値浮木孔

たとふなる浪ちのかめのうきかはあはてもいくよしほれきぬらん 三〇〇」
(冷泉 [1940/1974]26 頁)

これは「釈教歌」などではない、世俗的愛の表現の極致、いわゆる「恋歌」と理解した。「盲亀と浮木」は、恋歌にあつては「男と女」の喩えである。『法華経』を一般向けに解説する文章の中に、仏教が否定する世俗的な重大関心事

である「恋」を歌った「恋歌」も悪くはないだろうと考えて、その歌の意味も深く突き詰めないまま、金沢 [2012] の中に『妙法蓮華経』『妙莊嚴王本事品』の「一眼之龜値浮木孔」を解説した上で、藤原定家の「盲亀浮木の喩」を取り込んだ一つの恋歌について、筆者は以下のように書いたのである。

「たとえば、『新古今和歌集』などの編纂者として名高い藤原定家の「たとふなる浪路の亀の浮き木かは逢はでも幾夜しをれきぬらむ」という恋歌が、『法華経』のこの「亀と浮木」を踏まえたものであることを知っておくのも一興だと思います。」（金沢 [2013]37 頁）

だが、この歌の解釈のポイントは、「盲亀と浮木」のそれぞれが、男と女の何に喩えられているのか？ また、「あはでも」の「も」はどのような意味か？ 「しをれきぬらむ」の「き」は、「しをれてしまう」なのか「来てしをれる」のか、「しをれながら来る」のか？ 久保田 [1985] の解釈が唯一の訳例のように見える中、久保田訳が、筆者には、あまりにも曖昧に過ぎて、「盲亀浮木の喩」を美事に取り込んだ作品のように見えないということであった。詩の醍醐味のことを言っているのだが、筆者の忌避すべきは、二つのもの間に成立する「関係」表現への気配りの欠如である。X と Y の関係、という表現ほど悔しいものはない。関係とは常に不平等なものである。その不平等によって、悲劇も喜劇も成立するのである。その不平等ぶりを文言で表すとしたら、「X(gen) の Y(instr) との某かの関係」となるであろう。藤原定家のその盲亀浮木を用いた「恋歌」は、まさしくその形式で表現されていたので、筆者の心を捉えたのだと言える。「波路の亀の浮木かは」のことを指して言っているのである。「亀と浮木は平等ではない」を強調したい。そこにこそ有られも無い恋の物語が成立すると筆者は言いたいのである。亀は動物、活動的、動的である。浮木は静物、静的である。亀は大海にあって必死に泳いでいる必要がある。ずぶ濡れになって、波にさらわれ、波に抗い、何とか目的のものをゲットすべく努力する存在である。一方浮木は大海に浮かんで、風と波のままに漂っている。東へ流されようと、西へ流されようと、浮木は構うことはない。浮木に心などあるだろうか？

二年間の連載「『法華経』の彩り」を終え、それを私家版の小冊子にして出版したころであったか。雑誌の発行所の佼成出版社が、その連載を今度は、同社が保有する英文季刊誌 Dharma World 誌に英訳して連載すること、英訳

者はロルフ・ギーブル氏。筆者はそれを拒む理由のないままに、むしろそれを楽しみにするにいたった。そして、いよいよ「第15回亀」の番が回ってきた。日本語の達人でもあるギーブル氏でも、鎌倉時代の和歌は難解、しかも藤原定家である。自在に英訳出来るわけではなかったようで、その歌の意味を問い合わせてきたという次第。英文にするには、主語を明確にし、誰の誰に対する心情を歌ったものであるかを明確にすべきということになった。筆者にとってその歌の唯一の解釈のお手本は、著名な国文学者である久保田 [1985] のみである。それを一瞥した上で、筆者は、その歌の自分なりの解釈を（あ）（い）の二通り記して、メールしたのである。

（あ）「[わたしは] あの浪路の盲亀浮木の譬えにある浮木だろうか、[彼はわたしに] 逢うことが叶わずとも、幾晩も、ずぶ濡れになりながらも、来ることであらう」

（い）「譬えれば、[わたしと彼女は] 盲亀浮木だろうか、逢うことが叶わずとも、幾晩も、恋い焦がれ疲弊しつつ来ることであろう」（2014.4.26）

ギーブル氏からは直ちに、試訳が届けられた。それが以下のものである。氏の英訳は、筆者の（あ）に添ったものである。

Am I the floating log for the turtle out at sea, as in that simile? Lovelorn, he'll come night after night even if we do not meet.(2014.4.27)

一瞥した国文学者久保田氏の解釈とは以下のものである。

「又如一眼之亀值浮木孔

300 たとふなる浪ぢのかめのうき木（ゞ）かはあはでもいくよしを（ほ）れきぬ覧」（久保田 [1985]52 頁）

「300 盲亀の浮木の喩えではないが、あの人に会えないで、私は幾夜泣きしおれていることだろう。」（久保田 [1985]52 頁頭注）

「300 ▽題の法文は『法華経』妙莊嚴王本事品第二十七で、浄蔵・浄眼の二子が父母に告げていう「仏難得値、如優曇波羅華、又如一眼之亀、値浮木孔」の句による。」（久保田 [1985]481 頁補注）

筆者の先の解釈（い）とは、この久保田氏の解釈を踏まえたものである。そ

して敢えて（い）を添えたのは、古語にも和歌にも定家にも通じた専門家である筈の久保田氏の解釈が妥当なものなのかも知れないと考えてのことである。だが、そうは言いながらも、喩えの多用されるインドの文学作品などに日常的に接している筆者としては、そのようなルーズな喩えの用い方にはやはりどうしても与する気にはなれなかった。恋とは「対幻想」でも「共同幻想」でもない、あくまでも「個人幻想」に過ぎないのである。久保田氏の解釈では、そのあたりが何一つ明確にならないのである。

「あの人」と「私」が具体的に、どのような状況にあるどのような人物であるのかが、明確にならない。通常理解だと、「私」は、歌の作者たる「藤原定家」ということになるのだろう。恋歌であることが明らかであるから、そうだとすると、「あの人」は、定家が恋い焦がれている意中の「女」ということになる。「私と彼女は、滅多に会うことの出来ない盲亀と浮木」ということになる。「私」は「盲亀」であり、「彼女は」「浮木」である。久保田氏の解釈をより厳密に言葉にするならば、こういうことになるだろうか。「『妙法蓮華経』の」盲亀の浮木の喩えではないが、[浮木の如き] あの人に会えないで、[盲亀の如き] 私は、幾夜泣きしおれていることだろう。」

そのギーブル氏による英訳を目にして、直ちに筆者は以下のメールをギーブル氏に返した。

「英訳拝見。なるほどと感心しました。Lovelornの意味がよくわかりませんが、英和辞典によれば「片思い」とありました。「しをれ」という語の意味を反映させるとしたら、「恋い焦がれる」って感じの方がベターのような気がします。また、even if we do not meetの箇所、「盲亀浮木」の譬喩を反映させるとしたら、「逢はでも」を「滅多に逢うことが出来ないとしても／幸運に恵まれないと、決して逢えないとしても」のようにするといいいのでは？ いずれにしても、英文もそうですが、日本語も、主語を明確にしないと意味が通りませんね。「来ぬらん」の主語は「男」だと考える他ないと思いますが、その場合、定家作のその歌が、「女」の立場で歌われたと解する他ないことになります。そのあたり難しく腹をくくる必要があると思いますが、わたしは、この訳でいいと思います。」

それに対して、ギーブル氏はまた直ちに、以下のような訳例を届けてくれた。メールの末尾には、締め切りまでなお二ヶ月ほどあるので、「時間をかけてももう少し練ってみます」とあった。

“Am I the floating log for the turtle out at sea, as in that simile? Lovesick, he'll come night after night even though we may not meet.”

そうして筆者がギーブル氏に対して最終的に提示した解釈「わたしは、譬喩の中の盲亀に対する浮木だろうか？（奇跡でも起こらぬ限り）逢えないのに、あなたは、幾晩も来ては、泣き濡れていることだろうか？！⁶」に対して、ギーブル氏の最終的な英訳が、

“Am I the floating log for the turtle out on the ocean, as in that simile? Unlikely to meet, still you have come on how many nights, wet with tears.” (Kanazawa[2014], p.33) である。泣いても笑ってももう取り返しはつかない。後の祭りであるが、定家の問題の恋歌に対する一つの素晴らしい解釈になっているのではないかと考える。

この解釈の基本は「亀は男、浮木は女」ということである。これでこそ、恋歌の中に用いられた「盲亀浮木の喩」が生きているのではないか。筆者も、英訳者のギーブル氏もこの点に関しては最初から迷いはなかったように思う。「定家はむしろしばしば女の立場で歌を詠むことがあった」、「遭おうとして遭えずに泣くのは男の常」との国文学者からの助言に意を強くしたこともある。「会いたいけれど会えないから泣いている」という解釈ではこの「盲亀浮木の喩」は生きない。「会いたくて、会うための努力を必死に重ねているけれど、その都度結局会えないで泣いている」という解釈でこそ、「盲亀浮木の喩」は生きているのではないだろうか。そして、亀を男に割り当て、男に愛されていると自覚している浮木の如き女が男のことを思って歌った歌が定家の問題の恋歌である⁷。

筆者が、久保田訳で当初から不満に思っていた点は、こうである。「盲亀の浮木かは」、定家の和歌は、論理学研究の場合に気をつけるべき、関係の不可逆性を明確に表現しているという点である。「XのYとの某かの関係」、さすが定家と筆者は、この和歌だけで定家を絶対的に評価したくなったのである。上の句で「浮木」が、下の句で「盲亀」が表現されているのである。

詩の解釈は、読者にすべて委ねられているとする立場よりすれば、久保田訳は、曖昧ではあるが最も穏当なものと言えるのかも知れない。だが、筆者は大

いに不満である。定家の表現をそのようなルーズな解釈に委ねるべきではないと思われたのである。『妙法蓮華經』において用いられる「盲亀浮木の喩」にしてからが、そのようなルーズなものではないのである。先に見た『梁塵秘抄』にあったように、「浮木」が法で、盲亀が衆生／菩薩と考えることを要求していたのである。主体的に意志を持って足掻く方が盲亀で、スタティックな浮いているだけの存在は、真理ないし真理を具現している仏陀などである。亀と木である。いわゆる動物と静物の差は決定的であると思われる。それを活かしたような詩的表現でないとするれば、この詩は凡庸な愚作という他ないのである。

英訳が世に出てからしばらくが経った。筆者は、それを一本のエッセーに仕上げるべく模索していたが、以下に引用するのは、その折、筆者が偶然ネット上で遭遇した文章である。《クラシック歌曲の森へ》と称するあるブログだが、その記者に関しては何一つ知ることはない。九条良経（藤原良経）の『新古今和歌集』所載の和歌「幾夜われ浪にしほれて貴船川袖に玉散る物思ふらむ」について論じているのだが、それが筆者のここでの議論にも深く関わりを持つのである。

『九条良経 - いくよわれ なみにしほれて

あまりにも華麗で冴えた技巧を目の当たりにすると、茫然とその人を見つめてしまい、やがて感動が押し寄せてくる。良経の秀歌を目にしたとき、定家もそんな体験をしたのではないだろうか。例えば新古今入撰の次の歌など。

祈恋

幾夜われ浪にしほれて貴船川袖に玉散る物思ふらむ

九条良経（六百番歌合 恋二）

「幾夜私は波と涙でうちしおれて、貴船川のほとりの貴船明神に詣で、蛍のような涙の粒（玉）を袖で散らし、魂も散らし、物思いをするのだろうか。」

これは後拾遺集からの本歌取りだが、ただの本歌取りではない。情景描写を加え、相聞歌を二首とも取り込み、ふたりの問答を下句で再現するという、眩い

ばかりの技巧を駆使している。上句は、失った愛に思い悩んで夜な夜な貴船（縁結びの神）へ詣でる和泉式部を描く。涙と川浪に式部の袖は「しほれて」いるが、それは貴船明神に文字通り「来舟川」だからである。さらに下句はいわゆる双貫句（7-7を併置）だが、これは式部歌の「もの思ふ」と明神の御返し「たまちる」を併置して、両者の問答を一首のなかで再現している。これだけの内容を、ただの一首で再現してしまったこの天才的な技法。本歌取りを得意とした定家も、まさに顔色無しだっただろう。 —

男に忘られて侍るころ、貴布禰に参りて御手洗川に蛍の飛び侍りけるを見てよめる

もの思へば沢の蛍もわが身よりあくがれ出づるたまかとぞ見る

和泉式部（後拾遺集 1162）（たま＝玉＝魂）

御返し

奥山にちぎりて落つる滝つ瀬のたまちるばかりものな思ひそ（同 1163）

この歌は貴船の明神の御返しなり、男の声にて和泉式部が耳に聞こえけるなんいひ伝えたる — 』

何と熱く讃える文章だろう。藤原（九条）良経の「幾夜われ浪にしほれて貴船川袖に玉散る物思ふらむ」という恋歌の絶賛である。この文章からも容易にわかるのは、藤原良経のその和歌が、それに先立つ和泉式部による「相聞歌」と呼び得る二つの和歌、

もの思へば沢の蛍もわが身よりあくがれ出づるたまかとぞ見る（女）

奥山にちぎりて落つる滝つ瀬のたまちるばかりものな思ひそ（男）

を踏まえて作られているらしいことである。そして今筆者の頭にあるのは、『新古今和歌集』の撰者でもあり、良経の問題の和歌の直後に自作の

としもへぬ祈る契りははつせ山をのへの鐘のよその夕暮⁸

を置いている藤原定家の本稿で問題にしたい一恋歌、

たとふなる波路の亀の浮木かはあはでもいくよ萎れ来ぬらん

の成立事情に対する夢想である。その和歌が、藤原良経の問題の祈恋歌に直接的に刺激された結果、『妙法法蓮経』の「妙莊嚴王本事品」の「又如一眼之龜。

値浮木孔。」を加味した上で、詠まれるに至ったのではないかと言いたいのである。

先に引いた九条良経についての文章の書き手はわたしには知れない。その文章の代わりに、例えば青柳恵介 [1978] や塚本邦雄 [1975] や寺田透 [1971] のいずれかのパッセージを置いてもいい。そこで言及されているのは、恋に積極的であった和泉式部（女性）の経験に即した恋歌と言い得るものようだが、それを踏まえて、藤原良経の和歌が生まれ、それらを踏まえて藤原定家の今問題の恋歌が生まれたと筆者は考えているのである。そして、先行する和泉式部と藤原良経両者の恋歌には微塵も姿を現していない『法華経』「妙莊嚴王本事品」の「盲亀浮木の喩」が、藤原定家によって直裁的に織り込まれているのである。管見によれば、これまで誰一人、これらの和歌のつながりを指摘していない。定家のこの恋歌が定家自身の適わぬ恋の所産かどうかは不明だが、盲亀と浮木（孔）が、男と女の恋のドラマを廻って描かれているのだとしたら、盲亀は男で浮木は女でしかありえないというのが、筆者の視点である。ニヒルな男に対して女が積極的に恋をしかけることもあり得るだろうが、定家は敢えて盲亀浮木を織り込むことによって、和泉式部の恋歌の逆世界を虚構したと考えたい。ことは他ならぬ亀である。亀が果たして女の譬喩に用いられるだろうか？ということである。

恋歌にも『法華経』にも深く通じていた松山俊太郎先生が、もしご存命であったらば、是非伺ってみたかったところである⁹。そして、このエッセーの構想が、頭の中でまとまったところに、筆者は偶然にも、以下の水垣久氏による定家の『拾遺愚草』全釈、水垣 [2013b//2014R] というものを参照することが出来たのである。先に見た久保田淳氏の解釈しか持たなかった筆者としては、直ちに飛びつくようにして水垣久氏の解釈を読んだ。そこには、やはり定家の専門家と言い得る水垣氏による、久保田淳氏とは決定的に異なる決然とした一つの解釈が示されていた。水垣氏の解釈は、久保田氏のように曖昧ではないが、やはり「盲亀浮木の喩」を必ずしもうまく活用したものではなかった。水垣氏の解釈は以下の通りである。

「如一眼之亀値浮木孔

たとふなる浪路の亀の浮き木かは逢はでも幾夜しほれきぬらむ

たとふなる浪ちのかめのうきゝかはあはてもいくよしほれきぬらん（大輔 300）

「あの方は、逢い難いものに喩えるという、海を漂う亀の浮き木であろうか。私は一眼の亀さながら、逢うこともできずに、涙の床に濡れて幾夜過ごして来たことだろう。」の意。……定家は「一眼の亀」を「毎夜泣き濡れる女の喩え」に、「浮木」を逢い難い恋人に転じて、恋人に逢えない悲しみを詠んだのであろう。

「亀の浮き木」は一眼の亀が出逢えた、大海を漂う浮き木。逢い難い物の喩え。「しほれ」、濡れそぼち。」（水垣 [2013b/2014R]）

筆者は、まさしくこの水垣氏の解釈を、二つの点で、受け入れたくはないのである。一つ、女を「一眼之亀」に喩えている点、二つ、「毎晩毎晩会いたいと思って泣き暮らしている」という点。「女でも会いたいのなら、会いに行けばいい、会うための努力をすればいい」、「しほれきぬ」の「きぬ」を二通りに読ませることで、それが適う。それでこそ、女を「一眼之亀」に喩える意味もあると言える。そうすれば、定家のその恋歌は、先に見た和泉式部の恋歌や良経の祈恋歌の夢をなぞり得ていると言い得るように思われるが、それは結局は先行する歌人たちの二番煎じ。会いたくて会いたくて、毎夜恋い慕う女を夢見て狂おしく通い詰め、探し求める盲亀の如き男の姿を、理想の男といつの日にか遭遇できることを夢見て日々暮らすいわゆる恋に恋する女の視点を通して虚構的に重層的に描いていると解することで、そこに若き藤原定家の独創性を抉り出せるのではないか。

和泉式部の相聞歌の世界を統合したような良経の歌を仲立ちとして、男の愛の世界を描いているようでありながら、結局恋は個人幻想、「盲亀浮木の喩」を重ね合わせると、男と女の世界は決して一つになることはないのである。定家のこの虚構的恋歌の世界は、定家後年の歌にして、『新古今和歌集』の中では、良経のその歌の次に置かれた自作「年もへぬ祈るちぎりははつせ山尾のへの鐘のよその夕ぐれ」と同じ恋情によるさらに過激なもう一つの夢の世界を描いたものとなっている、と筆者は言いたいのである。いかがだろう。

この水垣氏の解釈の他にも、定家のこの恋歌に関連しては、問題にすべき点があるように思われる。一つは古典作品の宿命であるヴァリアントの存在である。どれを定家本来の歌と考えたらいいかという問題である。

冷泉為臣 [1940//74] などに見られる読みを基本的には受け入れた上で、筆者による本稿は成り立っている。

だが、佐々木 [1931] には、以下のような読みが採用されている。

「たとふなる波路の亀の浮木かはあはでもいくへ萎れ来ぬらむ」(佐々木信綱 [1931]28 頁)

この佐々木氏の読みの中にある「いくへ」の意味がよくわからない。また、『法華経』の解説本の中に定家の問題の和歌を廻って明確に展開される以下の渡辺宝陽氏の記述の不可解さを指摘しておきたい。

「たとふなる波路の亀の浮木かはあひても幾世しを来ぬらん

藤原定家（定家集）・・・・＜中略＞・・・・

後の藤原定家の歌は、浄蔵・浄眼の二子が父母に対して、片方の眼を失った一眼の亀が大海をたまたま漂流してきた浮木の孔をくぐり抜けたりすることが困難¹⁰であるように、仏陀に出会うことはきわめて難しいと説く経文のこのころを詠んだものである。」（渡辺 [1994]320 頁）

(未完)

【略号・参考文献】

Borges, Jorge Luis

[1980/1981/1982]:*Siete Noches*, Fondo de Culutura Económica:México.

Kanazawa Atsushi

[2014]:“The Prism of the Lotus Sutra (6)”, *Dharma World*, Oct.-Dec. 2014 (Vol.41)

Kern, H.

[1884//1965]:*The Saddharma-puṇḍarīka or the Lotus of the True Law*, Delhi, etc.

Kern, H. & Nanjio, Bunyiu

[1908-1912//1970]: *Saddharmapuṇḍarīka*, Osnabrück.

Yamamoto Kosho

[1973]:*The Mahayana MAHAPARINIRVANA-SUTRA: A Complete Translation from the Classical Chinese Language in 3 volumes...*, Ube: The Karinbunko.

青柳恵介

[1978]:「藤原定家における述懐的なもの」『成城芸芸』第 85 号

安藤次男

[1977]: 著『藤原定家』（日本詩人選 11）筑摩書房

石川常彦

[1989]: 校注『拾遺愚草古注（下）』（中世の文学）三弥井書店

岩佐正

[1940]: 校訂『新葉和歌集』岩波文庫

榎克朗

[1979]: 校注『梁塵秘抄』新潮社

織田得能

[1899]: 著『法華經講義 下巻』光融館

片山一良

[2002]: 訳『中部（マッジマニカーヤ）後分五十経篇Ⅱ』（パーリ仏典 1-6）大蔵出版

金沢篤

[2012]: 『法華經』の彩り 第15回亀』『佼成』3月号

久曾神昇・樋口芳麻呂

[1961]: 校訂『新勅撰和歌集』岩波文庫

久保田淳

[1985]: 著『訳註 藤原定家全歌集 上巻』河出書房新社

[1986]: 校注『千載和歌集』岩波文庫

久保田淳・山口明穂

[1981]: 校注『明恵上人集』岩波文庫

坂本幸男・岩本裕

[1967//1976]: 訳注『法華經 下』岩波文庫

佐々木信綱

[1928]: 校訂『新訂 山家集』岩波文庫

[1931]: 校訂『藤原定家集 附年譜』岩波文庫

[1933//1941]: 校訂『新訂 梁塵秘抄』岩波文庫

[1929//1959]: 校訂『新訂 新古今和歌集』岩波文庫

清水文雄

[1956]: 校訂『和泉式部集』岩波文庫

[1983]: 校注『和泉式部集・和泉式部続集』岩波文庫

塚本邦雄

[1975]: 著『藤原俊成・藤原良経』（日本詩人選 23）筑摩書房

次田香澄

[1944]: 校訂『玉葉和歌集』岩波文庫

寺田透

[1971]: 著『和泉式部』（日本詩人選 8）筑摩書房

中村元

[1982]: 訳『尼僧の告白：テーリーガーター』岩波文庫

中村元・早島鏡正

[1964]: 訳『ミリンダ王の問い 2』平凡社

長尾佳代子

[2005]: 訳「第一二九経 愚者と賢者——癡慧地経」『原始仏典 第七巻』春秋社
野谷文昭

[1997//2011R]: 訳『七つの夜』(J. L. ボルヘス著) みすず書房// 岩波文庫
樋口芳麻呂

[1983]: 校注『王朝秀歌選』岩波文庫

[1987]: 校注『王朝物語秀歌選(上)』岩波文庫

[1989]: 校注『王朝物語秀歌選(下)』岩波文庫

松濤誠廉・丹治昭義・桂紹隆

[2002]: 訳『法華経Ⅱ』中公文庫

水垣久

[2013a//2014R]: 編『新校 拾遺愚草 kindle 版』やまとうた e ブックス

[2013b//2014R]: 著『拾遺愚草全釈一 kindle 版』やまとうた e ブックス

[2013c//2014R]: 著『拾遺愚草全釈二 kindle 版』やまとうた e ブックス

冷泉為臣

[1940//1974]: 編『藤原定家全歌集』国書刊行会

渡辺照宏

[1977]: 著『法華経物語』大法輪閣

渡辺宝陽

[1994]: 著『法華経・久遠の救い』NHK 出版

【註記】

¹ 「生世爲人難 値佛世亦難 猶如大海中 盲龜遇浮孔」(大正蔵 Vol.12 612b, ll.17-18)

² It is hard to be born as a man; harder still is it

To encounter the Buddha when he appears in the world.

It is as in the case of a **blind turtle**

who, in the midst of the ocean, may chance to hit *the hole*

In a piece of floating wood. (Yamamoto[Kindle Ed.], No. 579/18052)

³ 7たとえば、比丘たちよ、人が一孔のある輓を大海に投げ込むとします。それを、東風が西方へ運びます。西風が東方へ運びます。北風が南方に運びます。南風が北方へ運びます。そこに盲目の亀がおり、百年ごとに一度、浮かび上がってくるとします。

比丘たちよ、そのことをどう思いますか。つまり、その盲目の亀はその一孔のある輓に首を入れることができるのか、ということです

「尊師よ、もしもできるとすれば、いつか、いつの日にか、長い時が過ぎた後でありましょう」

「比丘たちよ、その盲目の亀がその一孔のある輓に首を入れるのはむしろ速やかなことです。それより、一度悪処に落ちた愚者が人間の状態を得ることはさらに難しい、と私は説きます。それはなぜか。比丘たちよ、ここには法行、正行、善行、功德行がないからです。

比丘たちよ、ここには互いの食べ合い、弱肉強食が行なわれるからです。(片山[2002]100-101頁)

- ⁴ また、『法華経』の研究者として名高い渡辺照宏氏の「盲亀浮木」についての貴重なコメントも記しておく。「さてウドゥンバラの華の譬喩は法華経の他の章にも出ているが、次の“盲亀に浮木”の譬喩は法華経としてはここ1回きりである。ただし同じ譬喩は雑阿含十五にも出ている。それによると、大海にただ一本の木片が浮いていてそれには穴が一つしかない。また大海の底には片眼の亀が一匹住んでいて百年に一回しか海面に上がって来ない。その亀がその木片の穴に首を突込む可能性はきわめて少ない。われわれが地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天という六趣に生死輪廻している間に仏陀の出現にめぐりあい、その説法を聴聞する可能性はそれと同じ程度に稀だといっているのである。この妙莊嚴王本事品の原文には「大海の軛の穴に亀の首が入るが如く」とあり、妙法華では「一眼の亀の浮木の孔に値うが如し」と訳してある。おそらく法華経の作者は読者がこの譬喩を知っているものと予想したのであろうし、漢訳者は老婆心から“一眼”の語を補ったものであろう。」（渡辺照宏 [1977]354 頁）
- ⁵ 『仏教語大辞典』（中村元著）の「盲亀浮木」の項目には「大海を泳ぐめくらの亀が浮木に会いたいことを、人と生まれることの困難さ、さらにその人が仏法に会うことの困難さにたとえたことば。」（1364 頁）とある。
- ⁶ 筆者がこの最終的な解釈をひねり出すにあたっては、東京大学大学院の渡部泰明教授のご教示に与ったことを記して感謝の意を表しておきたい。ただし、筆者の解釈の責めはただ筆者にのみあることは言うをまたない。
- ⁷ だが、若き定家によるこの恋歌が定家自身の恋の実体験を踏まえたものであると考える必要はない。詠み手を女に設定していることなど、むしろ虚構的な重層的な恋歌と見なすべきではないか。時間の制約から種々の註記も含めて詳論は断念し、本稿ではその指針を示すに止めた。諒とされたい。
- ⁸ 年もへぬ祈るちぎりははつせ山尾のへの鐘のよその夕ぐれ（定家）（拾遺愚草上 六百番 856）
- ⁹ と言いつつも、筆者が畏れているのは、既に松山先生がどこかでこの件について論究している可能性である。
- ¹⁰ 渡辺宝陽氏は記しているが、そもそも浮木の孔など、仮に遭遇したとしても、どのような亀であろうともくぐり抜けることなど出来そうにない。遭遇して可能なのは、浮木孔に亀の頭を突き入れることばかりであろう。

（本稿は JSPS 科研費 24520406 の助成を受けた研究の成果の一部である）